いのち・食・生きるに触れる

酪農家民泊体験実習 2016

～教育フィールド研究Ⅷ～
実施報告

北海道教育大学釧路校

教育フィールド研究 Ⅷ シラバス

【授業内容】

人間が生きていくために欠かせないのが「食」であり、いのちの糧「食」の大切さを子どもたちに伝えていくことは、教員の大きな役割である。また、生産現場では、どんな人たちがどんな思いを持ち、どんな風に生きているのか？そのことを知っておくことは、将来教員になる者にとっては大変大事であり、必要なことである。

しかしこれまで大自然と対峙した食を生み出す現場での実習はなかなか実現できなかった。本講義は、酪農生活体験を軸とした２泊３日の生産現場での「酪農家民泊体験実習」を行い、実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに「食」や「命」についての意識や考えを深め、将来、自身が教員になった時をイメージしながら子どもたちに伝えるための手法を検討し、議論、共有していく。

【授業の目標】

酪農生活体験を軸とする「酪農家民泊体験実習」を通じて、実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに、「食」や「命」等に関する意識や考えを深め、教員として子どもたちに伝えるための手法を検討し、議論、共有する。また、抽出された課題をもとに「食」から「生きること」へと議論を発展させ、「社会の中で生き抜くチカラ」を育む教育について検討する。

【到達目標】

酪農生活体験を軸とする「酪農家民泊体験実習」に参加することで、「食」や「命」等に関する意識や考えを深めることができる。

実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに、他者とも議論、意見を共有しながら教員として子どもたちに伝えるための手法を検討することができる。

抽出された課題をもとに「食」から「生きること」へと議論を発展させ「社会の中で生き抜くチカラ」を育む教育のあり方を検討していくための基礎的視野を養うことができる。

問い合わせ
〒085-8580　北海道釧路市城山１丁目 15 番 55 号
北海道教育大学釧路校（担当 准教授 宮前耕史）
TEL：0154(44)3238 FAX：0154(44)3218

酪農家民泊体験実習

～いのち・食・生きるに触れる　２泊３日のプログラム～

【酪農家民泊体験】
酪農家での農村ホームステイでいのち・つながり・家族に触れ、生きることを体感

【振り返り・講義】
ホームステイを振り返り、また講義からそれぞれが感じたことをワークシートに記入

【議論・まとめ】
それぞれが感じたことをシェア。いのち・食・生きるを軸にみんなで議論

↓

子どもたちに何をどう伝えるのか？

体験をどう活かしていけるのか？

↓

将来教師になった時に必要な力を育む

食の話題にあふれる現代社会。
教師が子どもたちに伝えられるコト。

いのちの糧「食」の価値を感じ･考え･伝えるために

～教師を目指す学生のための酪農家民泊体験実習～

現在、学校においても様々な食育の取り組みが行われている。

これをさらに充実発展させるためには日々子どもと向き合う教師自身こそが「食」村これを生み出す第一次産業、そして農山漁この価値を「体験」を通じて身をもって実感し、考え、他者に伝える力を身につけていることが必要である。

このような力量を備えた教師を育成することは食糧生産基地北海道、とりわけ我が国有数の農業地帯に囲まれた道東に位置する北海道教育大学釧路校の使命である。

※教育フィールド研究Ⅷプロジェクトの概要より抜粋

このプログラムは、根室地区農協青年部連絡協議会及び株式会社ノースプロダクションの全面協力のもと、希望する学生に一泊二日の農村ホームステイを提供するものである。

ホームステイは、根室地区農協青年部連絡協議会所属の酪農家宅で行う。その後実体験を振り返るワークショップを行って「食」についての意識や考えを深め、将来、自身が教員になった時をイメージしながら子どもたちに「食の大切さ」等を伝えるための手段を検討し、議論・共有していく。

平成28年度【酪農家民泊体験実習】実施報告

Step-1 農村ホームステイ

酪農家宅での１泊２日のありのままの生活体験

１日目、大学を出発したバスは一路、根室管内へ。

まず、牛の生態や酪農の仕事について酪農家さんから講義を受け、牛や酪農の基本を学びました。

その後12戸の受け入れ先の酪農家さんと対面。入村式を行った後、それぞれの家庭に散らばり、給餌・牛舎掃除や搾乳・哺乳といった１泊２日の農村ホームステイ、酪農生活体験がスタートしました。

ふだん何気なく飲んでいる牛乳が、どんな場所でどんな人たちによって、そしてどんな想いの中で生み出されているのか？酪農家さんのお宅での様々な作業体験のみならず、受入家庭での温かいふれあいなどからもたくさんの学びと気づきがありました。いのちの糧「食」が生み出される現場での実体験は、命と向き合い、「生きる」を考える大きなきっかけとなりました。

翌２日目のホームステイ終了後は、ＪＡ根室地区女性協議会の協力で調理実習を行いました。

Step-2 振り返り発表準備

生活体験を振り返り、共有する

２日目の午後は、根室管内標津町にある研修施設に移動。ワークシートに記入して、一人ひとりが自身の体験を振り返りました。その後グループワークを行って、ホームステイの感想や気づきを共有しました。

夕方には、「いのち」「食」「生きる」をテーマに、酪農家さんと本実習のコーディネーターである近江正隆氏に講話をいただきました。

３日目の午前中はグループワークの内容を参加学生全体で共有した上で、発表資料の作成等、受け入れ農家さんに向けた発表会の準備を行いました。

Step-3 発表講義

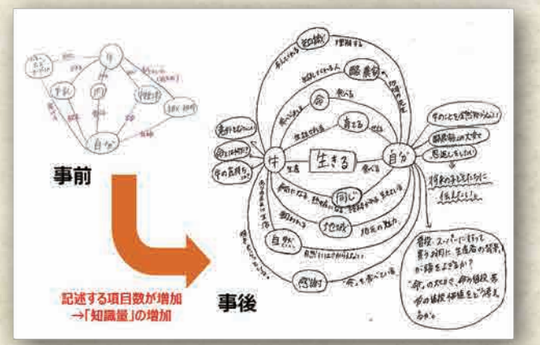
いのち・食・生きるを考える

３日目には受け入れ酪農家さんとバーベキューをしながらの交流。体験を通して感じたことを語り合いました。１泊２日の短い時間でしたが、想いを共有した酪農家さんと学生が、思わず涙する場面もありました。

そして、受け入れ酪農家さんをお招きし、農村ホームステイを通じた学びの成果を発表。学生たちは、「いのちの糧・食」とそれを生み出す第一次産業・農山漁村の価値を実感すると同時に、「つながり」や「つながりへの感謝」も感じているようでした。

Step-4 コンセプトマップ

体験前後の知識の変化を可視化して実感



事前研修会と実習２日目に、それぞれ「牛と自分の関係」を図式で表すコンセプトマップを作成しました。

自分の書いた事前・事後の２つのコンセプトマップを見比べ、農業に関わる「知識」の増加や「知識構造」の変化など、体験前後の自身の変化を実感しました。

平成28年度 酪農家民泊体験実習の概要

実施日：平成 28 年 5 月 27 日 ～5 月 29 日

実施地：根室管内　　参加者：教育フィールド研究Ⅷ選択学生・院生 24 名

5/27	8：00	出発式・大学出発
	10：00	酪農に関する勉強会
	11：00	入村式・酪農家さんとの対面
	11：30	農村ホームステイ開始（搾乳・牛舎掃除・給餌体験など）
5/28	11：45	農村ホームステイ終了
	12：00	調理体験実習
	15：30	講義①（グループワーク・講話）
	19：00	夕食
5/29	7：00	起床・朝食
	8：30	講義②（発表資料作成）
	12：00	受け入れ酪農家さんとの交流（バーベキュー）
	13：30	振り返り発表会
	14：15	退村式

酪農家民泊体験実習コーディネーターからのメッセージ

現在、この国の全労働者人口における一次産業従事者の割合は、わずか４％。１００人中４名。つまり２５人に１人が農林漁業に従事しているという計算だ。興味を持ちぼくが生まれた時代（４３年前）を調べてみた。その割合は２０％。つまり５人に１人。そしてぼくの親が生まれた時（７５年前）は、なんと４８％。つまり仕事に就いている人のほぼ２人に１人が農林漁業に従事していたことになる。

きっと昔は、多くの国民が家族や親戚の中に農林漁業者がいたんだと思う。つまり農林漁業・農山漁村が自分事として捉えることが可能な身近な存在だった。でも人口が首都圏・大阪や名古屋などの大都会に集中し、世代が次に変わるごとに自分事に考えられる立場の人たちは少なくなり、いまのような状態になってしまった。きっとこの割合はまだまだ減少しかねない…。

生きていくために欠かせないものがある。どんなに強くなっても、どんなに賢くなっても、どんなに偉くなっても、水や空気、そして食べ物がなければぼくらは生きていけない。そしてそれは、農山漁村で育まれている。農山漁村はそこに住む人たちだけに留まらない社会全体として大切な場所。でも残念ながら、大切な場所だと思うことをイメージできるような身近な存在でなくなってしまっていることが、様々な社会のねじれを生む要因をつくり、社会不安を作っている大きな原因ではないだろうか？だから敢えてしなければならないこと。それは国民みんなが農山漁村を身近に感じ、自分たちの家族が住むようなイメージを持ち、愛着をもって自分事として感じてもらうようになるための仕組づくりだと思う。そのための有効的な手段が「農村ホームステイ」であり、仕組づくりに向けては、農と学びの更なる連携が不可欠だと感じている。

株式会社ノースプロダクション
代表取締役　近江（おうみ） 正隆（まさたか）

＜プロフィール＞
1970 年東京生まれ。19 歳で単身北海道に移住。酪農・畑作・林業・漁業を経験。
現在企画会社ノースプロダクション代表取締役、また十勝管内で農村ホームステイを推進する NPO 法人食の絆を育む会理事長、北海道地域づくりアドバイザーなどを務める。
また、著書「だから僕は船をおりた」（講談社）がある。

参加学生の感想

人の温かみや感謝の気持ちをこれほど感じたのは初めてでした。命をいただくということの意味、それに関わる仕事をする人たちのことをもっと知り、また色々な形でかかわりをもっていきたいと思いました。

教師となる私たちが、今回出会うことのできた酪農家さんたちの想いをくみ、今回感じた多くの思いを伝えていかなければと強く感じました。

番外編！

命の尊さと生産者の想いを、高校生にも伝えたい
高校生の酪農家民泊体験のお手伝い

北海道教育大学釧路校「教育フィールド研究Ⅷ―酪農家民泊体験実習」の受講生が、大阪教育大学附属高等学校池田校舎の２年生 164 名が修学旅行の一環として釧路・根室管内で取り組んだ「酪農家民泊体験」のお手伝いをさせていただきました。

10 月３～４日、大阪教育大学附属高校池田校舎の２年生 164 名が、修学旅行の一環として、釧路・根室管内の牧場約 70 カ所で「酪農家民泊体験」を行いました。10 月４日には標津町文化ホールで高校生たちが体験を伝えあい、振り返る事後学習会が開催され、釧路校「教育フィールド研究Ⅷ―酪農家民泊体験実習」の受講生が、お手伝いとして参加させていただきました。

釧路校「教育フィールド研究Ⅷ」にも協力をいただいている根室地区農協青年部連絡協議会、釧路地区農協青年部協議会の会長 OB4 人の受入発起人の賛同の元、株式会社ノースプロダクション（近江正隆代表取締役）等の依頼を受け、実現しました。

学生たちは自分たちの民泊実習の体験も生かしつつ「振り返り」のプログラムを作成し、当日は自分たちで司会進行も行なって、プログラムを実施しました。

参加した学生からは、「高校生たちが体験を共有することで気付きの質を深めている様子を見て、話し合い、伝え合うことの大切さを改めて感じた」「高校生たちが自分の体験を楽しそうに友だちに話している様子に、自分の体験に対する誇りを感じた」といった感想が寄せられました。

～お手伝いに参加した学生の感想～

今回の活動にサポート役として参加させていただいた私から見て、友達の意見を聞いて納得したり、自分との違いを感じたりして、気づきの質を深めている高校生から、人と話し合い、伝え合うことはとても大切なことだと改めて感じました。そんなすてきな活動をサポートすることができたことを嬉しく思います。このような活動にこれからも参加していきたいと強く感じました。

ファシリテーターとして、サポートする中で私の方も学ぶことが多かったです。同じ体験をしても、高校生ならではの視点で振り返りをしていて、私が体験した時と少しずつ着目している点が違っていたのが面白かったです。私達は命のつながりなどを中心に考えていましたが。高校生は機械化する酪農を中心に考えていたように思います。

また、高校生が体験したことについて真剣に、一生懸命になってワークを記入していたり、周りの生徒に、夢中になって楽しそうに自分の体験を相手に話している姿に心を打たれました。みんながそれぞれ体験したことに誇りを持っている証拠なのだと感じました。

これからもたくさんの人がこの酪農体験をして、農家さんたちとも喜びや感動を共有し、地域を活気付けていってほしいと思いました。